

# 『枕草子』の赤き薄様

— 典型の表現と連想についての覚書 —

渡 辺 仁 史

## 緒言

『枕草子』には同じ素材が繰り返して登場する。それらは清少納言にとっていわばお気に入りであった。それらの素材は類聚的章段で列挙されることもあるし、また随想的章段等に鏤められることもある。

章段形成についてはこれまでに「ものはづけ」的即興から「随筆」化への方向性が指摘されている。<sup>(1)</sup> 類聚的章段の景物は「評価」「批評めいた短評」が加えられ「名称への興味」「典拠」にとどまらず「実体への関心」によって随筆化されるといふ。また、ここでは「機知」「即興」が重視されている。そうした章段があることを認めつつ、本稿では清少納言のお気に入り素材の取り合わせによって章段が構成される事例について考察してみたい。

## 一

最初に清少納言の好尚にかなう素材を含むいくつかの章段、あるいはその一部を列挙する。

紫の紙に棟の花、青き紙に菖蒲の葉細く巻きて結ひ、また、白き紙を根してひき結ひたるも、をかし。いと長き根を文の中に入れなどしたるを見るこちども、いと艶なり。(「節は」の章段36段)

草の花は、撫子、唐のはさらなり。大和のも、いとめでたし。(「草の花は」の章段64段)

冬は、いみじう寒き。夏は、世に知らず暑き。(「冬は」の章段114段)

返事を、いみじう赤き薄様に、「みづから持てまうで来ぬしもべは、いと冷淡なりとなむ見ゆる」とて、めでたき紅梅に付けてたてまつりたるすなはち、おはして(二月、官の司に)の章段128段)

扇の骨は、朴。色は、赤き。紫。緑。(「扇の骨は」の章段270段)  
常に文におこする人の、「なにかは。言ふにもかひなし。今は」と言ひて、またの日、音もせねば、さすがに明けたてば、さし出づる文の見えぬこそ、さうざうしけれと思ひて、「さても、きはぎはしかりける心かな」と言ひて暮しつ。(「常に文おこする人の」の章段278段) また、「あはれなりし人の文」という用例が27段にある。)

薄様、色紙は、白き。紫。赤き。茹安染。青きも、よし。(「薄様、色紙は」の章段一本12段)

「折枝」については小松茂美が平安仮名文芸での消息の用例調査から「料紙と折枝とは、だいたい同系色の色に合わせるのが原則であったようだ。」と指摘している。<sup>(3)</sup> これらの章段は清少納言が掲げる広義の美的景物を含んでいる。これらを含めて一つの章段を構成すると次のようになる。以下の二重傍線部で示されているのは前掲章段に含まれる傍線部の景物である。中でも章段の冒頭に挙げられている景物が多いのは注目すべきであろう。

いみじう暑き(114段) 昼中に、いかなるわざをせむと、扇(270段)の風もぬるし。氷水に手をひたし、持て騒ぐほどに、こちたう赤き薄様(128段) 一本12段(文) 27段、278段)を、唐撫子(64段)のいみじう咲きたるに結び付けて(折枝 36段 128段) 取り入れたること、書きつらむほどの暑さ(114段)、心ざしのほど浅からずおしはかられて、かつ使ひつるだに飽かずおぼゆる扇(270段)も、うち置かれぬれ。(「いみじう暑き昼中に」の章段185段)

この章段の景物はおおよそ先に掲げた章段で特筆されているそれとほぼ共通であ

る。また、二重傍線を付した景物以外に素材となる景物は「風」と「氷水」を除く  
 とほとんどない。二重傍線を付した素材は赤色に何らかの意味で関わる清少納言の  
 お気に入りの景物であろう。暑さと対照的な「氷水」を取り合わせつつ（あてなる  
 もの」の章段39段にもお気に入りの景物「白襲」「水晶」「梅の花」「削り氷」「雪」  
 に対する「いちご」の対比がある。）それらをふんだんに使用している。その上でこ  
 の章段は時宜にかなひすぎた文の送り主の「心ざしのほど浅からずおしはかられて」  
 という誠意と労力へのねぎらいと感嘆に収斂させ、「扇」をはたとうち置くところで  
 結ぶ。それらは息の長い係り結びで一括りにされている。読者にいかにもと思わせ  
 る、暑いさなかであるゆえにこそ赤色の素材の取り合わせとなった相手への感嘆の  
 表現を暑さという遠ざげえない身体感覚とともに述べている。暑さでさえ美意識の  
 対象にしてしまう、同じ連想でも本旨逸脱の章段と対照的ないわば対象追及的章段  
 であり、まさに過度に「折」にかなった章段と言えよう。<sup>(4)</sup>

ちなみに「赤き薄様」の示す意味は「二月、官の司に」の章段128段のように  
 戯れのようなものもあるが、一般的には恋文であろう。

月のいみじう明き夜、紙のまたいみじう赤きに、ただ「あらずとも」と書きた  
 るを、廂にさし入りたる月にあてて人の見しこそ、をかしかりしか。（成信の  
 中将は」の章段277段）

は恋文を見ているのであろう。「あらずとも」の句は『拾遺和歌集』卷第十三恋三の  
 月明かりける夜、女の許に遣はしける 源信明

787 恋しさは同じ心にあらずとも今夜の月を君見ざらめや<sup>(5)</sup>

によると指摘されている。

『蜻蛉日記』下巻でも藤原速度が道綱母の養女に送る求婚の文は「文取りて帰  
 たるを見れば、紅の薄様一襲にて、紅梅につけたり。」と見える。<sup>(6)</sup>『源氏物語』「梅枝」

巻には光君が朝顔姫君に「御返も其色（注 紅梅色）の紙にて、御前の花をおらせ  
 てつけさせ給。」と恋の心をほめかしている。また「若菜上」巻では女三宮が光君

と結婚してまもなく「紅の薄様」の文を送るし、「浮舟」巻では浮舟からの「紅の薄

様」を匂宮が読むのを見、それが浮舟の送った恋文「赤き色紙」であるらしいこと  
 を隨身から薫が聞き、浮舟の秘密が露見する場面もある。<sup>(9)</sup>

この185段は能因本にはないが、もちろん『枕草子』の傾向に矛盾するもの  
 はなく、むしろ『枕草子』の美意識を徹底したものである。徹底して一つの色調で  
 事象を捉えようとする美意識は『枕草子』の他の章段、たとえば「心ときめきする  
 もの」の章段26段や「過ぎにしかた恋しきもの」の章段27段の瀟洒なもの素  
 描とも異なるし、和歌の濃やかな連綿体とも次元を異にする認識のあり方であらう。  
 いたずらに素材の多さ・新奇さ<sup>(10)</sup>を誇るのではなく、また諧謔性のみでもなく、お気  
 に入りの題材を選び、その対象に即して切り取り方、遠近の表現方法も自在に変え  
 るのである。

## 二

世間に存在するものすべてを列挙しても意味はない。問題は素材がいかに文芸と  
 して変容したあり方で組み込まれているかということであろう。素材と表現は対立  
 するのではなく両者が言語化された対象として一元化されなければならない。『枕  
 草子』には思想性が乏しいとする批判が多くある。<sup>(11)</sup>しかし、文芸が思索的であるか  
 否かは個々の作品の主題次第であり、特に現代的意味での思想を含むことは必要条  
 件ではない。現代の問題意識を無媒介に異なる時代の作品に投影することは差し控  
 えなければならない。

前掲風巻論文が指摘するような素材の種類少なさが文化的閉塞を意味すると理  
 解するのは短絡的であろう。構成とは取捨選択の中から創出される出来であるとす  
 るならば、夾雑物の排除は印象の統一にとつて不可欠である。『枕草子』は個人の創  
 作であり、勅撰集のように多数の歌人による作品の集合体ではない。個人のこだわ  
 りや偏りをそれだけで狭量と判断できるわけではないと考える。一個人の作品と美  
 的景物を網羅的に撰集する勅撰集、『古今和歌六帖』、あるいは目的が異なる『和名  
 類聚抄』のような事典と同列に比較するのは誤謬であろう。風巻景次郎の「現実遺  
 棄の欲望」を『枕草子』に見出す見解は比較の共通項の必要性を考慮しないとい  
 う点で成立しえない。

興味深いのは清少納言が出仕以前の記憶に基づいて描いた「小白川といふ所は」の章段32段の回想の中に「いみじう暑き昼中に」の章段185段の景物がいくつか重なっていることである。それは以下の傍線部の暑さ、(扇)、赤い紙、撫子との類似性から指摘できる。

六月十日にて、暑きこと世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、いと涼しきこちする。(中略)すこし日たくるほどに、三位の中将とは関白殿をぞ聞えし、かうの薄物の二藍の御直衣、二藍の織物の指貫、濃蘇芳の下の御袴に、張りたる白きひとへのいみじうあざやかなるを着たまひて歩み入りたまへる、さばかり軽び涼しげなる御中に、暑かはしげなるべけれど、いとどいみじうめでたしとぞ見えたまふ。朴、塗骨など骨はかはれど、ただ赤き紙をおしなべてうち使ひ持たまへるは、撫子のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。(「小白川といふ所は」の章段32段)

この場面ではその直後に言及される「常よりもまさりておはする」義懐中納言と並んで、清少納言の中関白家への出仕前、花山朝の時代の藤原道隆とその周辺の印象的な情景が描かれる。この場面の景物は確かに一般的な取り合わせではあるが、ほかの人物とは異なる「暑かはし」くも華やかないでたちの道隆は「いとどいみじうめでたし」とされる。この章段の景物は回想によるものであり、清少納言によって改変されたものでももちろんない。むしろこの場の道隆の印象が清少納言の好尚を決定づけた感がある。あるいは『枕草子』の原風景的な面影をここに見出してよいのかもしれない。また、道隆がこの直後に花山帝をめぐる政争に関わったという認識は『枕草子』の叙述による限り特に投影されていないと考えた方がよいのではなからうか。『枕草子』でも「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、騒がしうなりて」(「殿などのおはしまさで後」の章段138段)としか書かれないように、あるいは女性が言及するのははばかられることであつたのかもしれない。

前掲の諸章段を見る限り、確立された美意識によって狭く限定された素材により構成されているという評価をするのではなく、「小白川といふ所は」の章段32段で見出したようにむしろお気に入りの素材(あるいはその逆の嫌悪するもの)を積極的・集中的に活用して文章を構成することで「機知」や「即興」というだけではなく、新たな美的典型を創出しようとする点に注意を向けるべきであろう。

関係は強いと言えよう。どれもそれほど新奇な景物ではないが、赤色と暑さの共感覚に関わるものとして清少納言の思い入れが窺える。

章段	折枝	赤／(白)紙	文扇	暑さ
32段	○棟／菖蒲葉・根	○赤(・撫子)	○	○
36段	○紅梅／白梅	(紫／青／白の紙)	○	○
128段	○赤き薄様／(白き色紙)	○	○	○
185段	○唐撫子	○赤き薄様	○	○
227段	○唐の紙の赤みたる	○	○	○
263段	○紅梅の薄様	○	○	○
270段	○	○	○	○

一般的な素材の場合の強い連想の広がりも多くはこの程度の規模であろうが、連想・対照の緩やかな関連をたどるならば「狩衣は」の章段267段周辺の服飾の多様な色彩の列挙や「八月つごもり、太秦に詣つとて」の章段213段のような「赤」と「青」の対比なども直ちに思い浮かぶ。類聚的章段、随想的章段、日記・回想的章段という内容・形態による登場の偏りもない。そうした意味では『枕草子』は連想の文芸という側面が強いということは言えるかもしれない。その場合、雑纂形態を想定しなければならぬのは言うまでもない。連想といつてもほぼ三巻本の配列の通りに連想・対照が並んでいるというわけではない。三巻本の本文で連想関係を限なく指摘しようとするのはやはりこじつけに陥りやすい。前掲の一覧でもそうであるが、隣接章段との線状的連想ではなくむしろ散在する章段の網状的連想を想定した方が作品の方向性に即していると考ええる。

### 結語

関連する素材群の集中と拡散の様相についていくつかの例を掲げ検討してきた。『枕草子』の連想系には濃淡があるが、素材として日常性に根差した景物・出来事は連想によりおおむね相互に緩やかに結びつけられているようである。本稿ではその中で比較的強い連想を伴う、「いみじう暑き昼中に」の章段185段のような清少納言のお気に入りの景物を集成した典型的章段に注目してみた。

『枕草子』の優れた点は一章段ごとの着眼点の良さであり、現実性から乖離した生硬な思想では表現できない、生きられた日常性への関心に満ち溢れた鋭敏な対象認識にある。それは日常性から一歩退いたところで行われる思索や、想像力を駆使

した物語の時間性の追求とは本来的に別途の読解の方法を要するものなのかもしれない。

『枕草子』の引用はすべて石田穰二訳注 新版『枕草子』上・下巻 角川ソフィア文庫 昭和54・8、55・4 に拠った。

## 注

- (1) 杉山重行「枕草子の類聚的章段」『枕草子講座1 清少納言とその文学』有精堂 昭和50・10
- (2) 「薄様色紙」は二語であるうとする松尾聰・永井和子校注・訳 新編日本古典文学全集『枕草子』小学館 平成9・11 の注釈に拠り説点を挿入した。本稿においても触れたが『源氏物語』「浮舟」巻に「紅の薄様」と「赤き色紙」が一对で使用されることがある。
- (3) 小松茂美『手紙の歴史』岩波新書 昭和51・9
- (4) 橋本不美男「折の形成と文芸」『王朝和歌史の研究』笠間書院 昭47・1 によれば「折」とは「不適合のあらゆる条件をなるべく拒否し、欠くことの少ない総合体、すなわち、時に従い、事に従い、人に従い、一つの主題で統一した、しかも完成した小世界の構成を意識的にこころみたまの」である。
- (5) 小町谷照彦校注 新日本古典文学大系『拾遺和歌集』岩波書店 平成2・1 ただし、表記を一部改めた。
- (6) 川村裕子訳注『蜻蛉日記』□ 角川ソフィア文庫 平成15・10
- (7) 今西祐一郎他校注 新日本古典文学大系『源氏物語』三 岩波書店 平成7・3 154ページ
- (8) 柳井滋他校注 新日本古典文学大系『源氏物語』三 岩波書店 平成7・3 246ページ
- (9) 室伏信助他校注 新日本古典文学大系『源氏物語』五 岩波書店 平成9・3 239・240ページ
- (10) 風巻景次郎「自然観照における新傾向の発生——『枕草紙』における自然観照の性質——」風巻景次郎全集第6巻『新古今時代』桜楓社 昭和45・10 は素材の多様性、新奇性に意義を見出そうとしており、『枕草

子』はその点で勅撰集等の素材の範囲を出ないとして低い評価を与えている。

(11) 阿部秋生「清少納言」『日本文学講座』河出書房 昭25・10 等

(二〇一八年九月六日受理)